研究の現場から

社会科学究室の研究動向

ムスリムと共生への関心

社会科学研究室 研究員　アブドゥラシィティ アブドゥラティフ

新型コロナウイルスの影響で、最近「コロナとの共生」という言葉が、よく耳に入ってくるようになったと思う。「〇〇との共生」という用語は幅広い分野におけるキーワードとして頻出する。「共生」という言葉は十九世紀に用いられるようになったが、この概念は、人類が集団生活を始めてから考えてきた課題でもある。一八七七（明治十）年、ドイツの植物学者A・B・フランクによって初めて提唱された「共生（symbiosis）」は、植物学者・三好学により一八八八（明治二十一）年に日本に初めて紹介された。一九二二（大正十一）年には、椎尾弁匡が仏教の共生運動を始め、哲学的な意味を含む言葉になっていった。

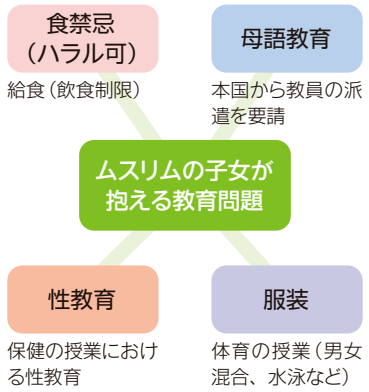
一世紀前に、国家間の緊張、民族間の対立、経済的な競争といった深刻な課題にぶつかり、解決の糸口を探った廣池千九郎博士は「人類の幸福、世界の平和」のため、『道徳科学の論文』を執筆したと思われる。「宇宙の法則」「天地の公道」の記述は、異なる国家、宗教、文化的背景を持つわれわれが生存するこの世界での「共生」の道をも明示したといえる。そして、その共生の始まりは、関心を持つことである。廣池博士の時代には、日本はイスラーム世界との接触がなかったため、博士はイスラームに関する研究を、今後の研究課題として後進に託している。

現在、ムスリム（イスラーム信徒）の人口は他の宗教信徒と比較して急速に増加している。日本において、十数万の在日ムスリム労働者と訪日ムスリムが年ごとに増え、二〇一八年には百万人を超えた。三十六都道府県に百五か所のモスク（礼拝堂）があるとともに、日本のハラル食品認定（輸出入）も進んでいる。したがって、在日ムスリムの社会生活、学校生活において（図）、共生の課題を解決するのに、イスラームに関する研究の重要性はますます高まっている。

「共生」は、同じ場所に住んでいるだけでなく、お互いに良い影響を与え合っているというニュアンスも含んでいる。そのため、共生するのに文化への理解が重要であるが、まず、「共生」への関心を持っていかなければならない。

異なる文化に触れ、文化について価値観が共有され、また、友人ができて、人間の性格、趣味、悩みを理解し、日々の生活におけるささやかな喜怒哀楽を周囲の人と共有するようになっていく。そして、自分の文化とは異なる文化的背景を基にする相手との対人関係のあり方を理解することで、さまざまな人がいることに気づき、異なる文化に対する先入観、ステレオタイプ的な思考を見直すことができる。

カルチャーショックを感じると、その文化への偏見や拒否反応となりがちで、相互理解の障害ともなる。この場合、自分から心を開き、異なる文化の人々とできる限り多く知り合い、コミュニケーションをとっていくのが文化を理解するうえで大切なことと考えられる。

私はイスラームの研究に従事している。維持員の皆様に「ムスリムとの共生」に関する新しい知見が提供できれば幸いである。

図